第10回夏期福音特別集会（1）（御岳駒鳥荘）

パウロの回心

――使徒行伝第６～９章――

１９６３年８月23日
小池辰雄

天霊地気　和の国民　パリサイ　律法の義　ステパノの殉教の死　何ぞ我を迫害するか　体見
キリストの突破　御霊のバプテスマ　十字架の突破口　義の福音体キリスト　我はキリストの
僕　聖霊の突破　キリストの霊名　あるがままそのままで　キリストの懐の中に　本当の大和
魂　中心を回る回心　一番大事なのは御霊

【使徒６】

1そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施済に漏らされたれば、ヘブル語のユダヤ人に対して呟く事あり。2ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『われら神の言を差し措きて食卓に事うるは宜しからず。3然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4我らは専ら祈をなすことと御言に事うることとを務めん』5集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とに満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、バルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、6使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。7かくて神の言ますます弘り、弟子の数エルサレムにて甚だ多くなり、祭司の中にも信仰の道に従えるもの多かりき。8さてステパノは恩恵と能力とにて満ち、民の中に大なる不思議と徴とを行えり。……

10その語るところの智慧と御霊とに敵すること能わず。……15ここに議会に坐したる者みな目を注ぎてステパノを見しに、その顔は御使の顔の如くなりき。

【使徒７】

51項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆らう、その先祖等のごとく汝らも然り。……54人々これらの言を聞きて心、怒に満ち切歯しつつステパノに向かう。55ス

テパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、56『視よ、われ天開けて人の子の、神の右に立ち給うを見る』57ここに彼ら大声に叫びつつ耳を掩い心を一つにして駆け寄り、58ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。59斯くて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』60また跪づきて大声に『主よ、この罪を彼らに負わせ給うな』と呼わる。斯く言いて眠りに就けり。

【使徒８】

1サウロは彼の殺さるるを可しとせり。

その日エルサレムに在る教会に対いて大なる迫害おこり、使徒たちの他は皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。……

【使徒９】

1サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝と殺害との気を充たし、大祭司にいたりて、2ダマスコにある諸会堂への添書を請う。この道の者を見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳かん為なり。3往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光いでて、彼を環り照らしたれば、4かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。5彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。6起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』7同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。8サウロ地より起きて目をあけたれど何をも見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、9三日のあいだ見えず、また飲食せざりき。

10さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影のうちに主いい給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』11主いい給う『起きて直という街にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。12又アナニヤという人の入り来たりて再び見ゆることを得しめんがために、手を己がうえに按くを見たり』13アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。14また此処にても凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』15主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』17ここにアナニヤ往きてその家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主、即ち汝が来る途にて現れ給いしイエス、われを遣し給えり。なんじが再び見ることを得、

かつ聖霊にて満たされん為なり』[18]直ちに彼の目より鱗（うろこ）のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、[19]かつ食事して力づきたり。

●天霊地気

東西南北からよくお出掛けくださいました。この山にいろいろな環境、事情、運命を突破して来られた。また、なかには本当に来たくてしょうがない方も、お子さんがいらっしゃるので、断念していただいたというのも三組ばかりあります。皆さんは代表者である。それでありますので、この集会はみな責任を持っておられます。ここにおいて受けた恵みを、帰りましたならば、しかるべき方々にわかち与えるという責任を持っておられます。このまる二日間でありますが、あしかけ三日の日を有効に送っていただきたいと思います。

特別集会というと、なにか少し妙にこだわるといけませんので、何がいったい特別かと。なるほど、いろいろな意味において特別に相違ないんですが、どうか、その「特別」というのが、

「これは特別集会で、そのあとはどうでもいい」

というような、そういった特別ではなくて、この特別がいよいよそのあとにおいて画期的なものであるという意味において、特別ならしめていただきたいと思う。

ここの額に、

「静かなること大湖に似たり」

とありますが、皆さんのその心境も「静かなること大湖に似たり」という、また、

「静かなること深山の如し」

と言ってもいいですが。本当にここは静かな山の中で、森の懐の中に我々は今入っている。静かな山の懐に入ったということは実は、山よりも静かな深い世界の懐に私たちはこの三日間入ろうということであります。

おもしろい言葉があります。「天霊地気」というんですが。

「天高くして日月懸（じつげつかか）り、地厚くして山河横わる。
日月の精、山河の霊、あつまりて我が心に在り。
高き天と、厚き地と、妙なる心と一つなり。
人無くして天むなしく、人無くして地寂し。
人の心の妙なるや、もって鬼神を泣かしめ、
人の心の霊なるや、もって天地に参ずべし。
燦（さん）たるかの月と日と、我が心を照らす。
我が心凝りて動くや、日月を貫く。」

やはり、日本の先輩にはこういった心境を勝ち得た人がある。こういったようなのは、なかなかヨーロッパには――それはたまにはそれに似たのがありますけれども――いない

のであります。皆さんは、私たちは日本人で、そして特にこの日月山河花鳥というような自然と非常に親しむ心を持っている。

「自然を征服する」

なんていう気持は日本人にはない。自然と親しむ。自然と溶け合う。そういった風土に我々は生いたっているのであります。やはり、そういった風土に生(お)いたっている人間の善さというものは、例えば、砂漠に育っている人、あるいは峨々たる山間に、不毛の山間に育っている人は、「自然を征服する」とか、「自然と戦う」とかいう面がありますが、日本人は自然と親しむ。

●和の国民

それで日本人というのは非常に本来、和の国民です。大和(やまと)、大和(たいわ)という。私たちの本来が柔和なんです。だいたい、百科事典を見ましても、日本人の顔は一番温和だということを私はあるとき驚いて見たことがある。なんとまぁ日本人というのは温和な顔をしているか。すこしわるく言えば、抜けているわけです（笑）。まぁドイツ人なんていうのは、抜けたやつは少ないような顔してますが。我々は抜けている。この抜けているのはいいんですよ、非常に。これは突き抜けている。抜けているが、

「どっこい、これは突き抜けてござる」

というところに、そういった突き抜けた抜けさを持つことは、我々の福音でなければ、この突き抜けた「ぬけた顔」はできないんです。妙な緊張したのではなくて、非常に仏さんみたいにほどけてしまって、そしてそれが本当に突き抜けた、抜けた顔をしている。

そういう親しい和の姿です。キリストは私たちに驚くべきこの和の世界を与えてくださる。これは新約聖書に出ている。

「神と和らがしめる」

という。我々は、福音的な意味において、この大和(たいわ)、大和(やまと)ということを身に付けなければいかん。実は大和が一番強い。我々は、我々の福音は本当の大和である。もはや一切の主義主張、セクショナリズム、そういうものから抜け出たところの、抜けた顔をしているわけです。それで、カトリックであろうと、あるいは仏教であろうと、イスラム教であろうと、何であろうと、一向差し支えない。ちっとも影響を受けない。いや実に私たちはそういった大きな和です。これがキリストが目指しておられたところの、

「全(まった)かれ」

というこの「全さ」なんです。

私が育った無教会というのは、「純粋」というようなことを言う。純粋だとか、純真だとか。非常にそれは――わるくはない――しかし、倫理的、道徳的な響きが強過ぎる。倫理道徳がわるいと言うのではない。それから、藤井先生が「真実」と言う。「真実」だとか、「純真」

だとか、「純粋」だとか――それはわるくはないですよ――けれども、福音は、汚れたもの、濁ったものを人から別かって己自ら潔しとするような、そういうのが福音ではない。福音というのはこの「和」なんです。ただし、この和はいい加減な和ではもちろんない。この和が一体どういう和かということはこの三日間に学んで、身に付けなくてはならない。

●パリサイ

このパウロというひとは、実は純真な方だった。純真の一点張りで、実に融通がきかない。彼はキリキヤのタルソに生まれた、ベニヤミンの族の「ヘブル人中のヘブル人」と彼自身が言っている。生粋の純粋の、まさに彼の生まれ自身も純粋なユダヤ人であり、その教育も多分ガマリエルにつきまして、若い時にエルサレムにも行ったらしい。シナゴーグでユダヤ的な教育を受け、「トーラー」、モーセの律法を、また律法の他に教法師から「預言者」を、要するに我々が言うところの旧約聖書はよく学んだに相違ない。

ただし、彼はギリシヤ語の訳で学んだと学者が言ってますが、おそらくそうでしょう。彼の引用の仕方が大体、ギリシヤ語の七十人訳聖書によっているようでありますので。教養の上からいうとギリシア文化を――キリキヤのタルソというのは、アテネおよびアレキサンドリアと三つ並び称せられるような当時の文化都市であったので――ギリシア的な教養からいいましても、彼は相当高度のものを持っていた。しかしながら、ギリシア思想に彼が非常に影響を受けたとは言えないのであって、これはシュバイツアーもその研究の上で証明しているとおり、彼の思想の中にギリシア思想が入っているということは言えません。どこまでもヘブライ的なものが彼を貫いている。ただ、表現やいろんなことにおいてギリシア的なものがもちろん身に付いてはいたというわけでありましょう。

彼が律法を学んだその学び方は、決して頭で学んでいるのではなくて、実に実践的に実存的にこれを身に付けて、どこまでも律法というのは彼にとっては生活と密接な関係を持っている。律法に生きるということ。正直、彼は律法に生きていると思っていた。それだけ彼は律法というものに対して非常に熱心であった。あるときには、それはほとんどファナテックに狂信的に思えるくらい、彼は律法に対しては非常に熱心であった。

たとえば、ルターが律法を一生懸命で守って、戒律を守って、どうも自分の心の中に、不安が、満たされないものがあるといったような、ああいう苦しみはむしろパウロにはない。ユダヤ人というのはむしろ、「律法を喜ぶ」という――詩篇119篇や何かによく出てくるように――律法を守ることを正直、喜んでいた。決してそれをただ外側で守っているとも思っていない。本当に律法に生きていたという自覚を持っていた。彼は本来、パリサイ人のパウロというものは、律法に対して非常に神学的な自信を持っている。律法に行き詰まるということがないわけです。だから、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言って、彼は誇ることができた。そして、そのことが即ち、神に忠実であり、神を喜ばせていると思っていたわけです。

であるからこそ、新しくイエスというのが現れてきて、そして、律法を破っているでしょ。パウロの熱心のような具合な熱心でないんだ、イエスというのは。安息日なんかも破ってしまうし。実に横紙破りみたいで、これは異端であります。このパリサイ的な角度からみれば、明かにこれは異端者です。新しい異端者が出てきて、これが十字架に付けられるのは当然のことで、しかも、当然に十字架に付けられたこの異端者をまた拝むようにしてこれに帰依しているご連中は、いよいよもってけしからんというわけです。パウロは自信満々でもって、律法の義の勢いをもって、イエスの道を行く者を迫害していた。だから、非常に律法に対して真剣であり、熱心であり、純真であり、真実である、とこういうわけです。これを「パリサイ」というんです。だから、他の者はぶっ殺しても差し支えないという。

●律法の義

ところが、キリスト教の歴史をみてごらんなさい。明日は、8月24日というのは聖バーソロミュー（サン・バルテルミ）の大虐殺事件のあった日（1572/8/24）です。カトリックがプロテスタントを、ある時はプロテスタントがカトリックを、血なまぐさい宗教的な争いをやって迫害した。たとえば、ウィリアム・ティンダル（1495～1536）というイギリスの宗教改革者が、マルチン・ルターの頃に出たのがいます。彼は新約聖書を初めて原典から訳しまして、あのオーソライズドバージョン（欽定訳聖書）の土台を作った人です。あのティンダルという人がイギリスの国教会から異端視されて、磔刑に処せられ、しかもおまけに焼かれてしまった。まぁひどいことしたもんだね。カルビンもちょっと間違ったことをしましたが。

それがみんな自分の主義主張、信仰、信条、それに対しては非常に忠実で、

「これこそが本ものである」

と主張する。これはみんなパウロの言う

「律法の義」

と同じです。パリサイ的な宗派的なもの。私たちの信仰はそれとは違う。大体、無教会に限りませんが、他の教会でも多かれ少なかれ、その角度を持ちたがる。

我々人間は特殊な存在ですから、ある特殊なグループを作ったり、その礼拝の仕方をしたり、それはいいですよ、それは大いに特殊で。けれども、その特殊なものをもって、自我中心になって、

「これでなければ」

というのがいかん、自我が。これがみんなパウロのサウロ時代のパリサイ根性と共通なものを持っている。

でありますから、彼は矛盾なく、この律法を肯定し、律法を本当に実践すると思い、こ

れに逆らったキリストを信ずる者を迫害したのは、実に自明な当然なことである。

●ステパノの殉教の死

ところが、使徒行伝の６章をまず開いていただきたい。

1そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、
その寡婦らが日々の施済に漏らされたれば、ヘブル語のユダヤ人
に対して呟く事あり。2ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『わ
れら神の言を差し措きて食卓に事うるは宜しからず。

「ヘレニステース」という。

これはパレスチナ本来の生まれのユダヤ人。

いろんな、信者や寡婦や何かへの食事の分配や何かのことです。

3然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人
を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4我らは専ら祈をなすことと御言に
事うることとを務めん』5集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊
とに満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、バルメナ、
またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、6使徒たちの前に立てたれば、
使徒たち祈りて手をその上に按けり。

祝福してそれぞれの任につかせた。そして、第一の任についたのがこのステパノであります。それからその後の方に出てくるピリポの伝道が素晴らしい。特にステパノとピリポが素晴らしいわけです。これが、

「信仰と聖霊とに満ちたる」

という。そして、６章、７章にステパノのことが書いてありまして、

8さてステパノは恩恵と能力とにて満ち、民の中に大なる不思議と徴とを
行えり。……10その語るところの智慧と御霊とに敵すること能わず。……15こ
こに議会に坐したる者みな目を注ぎてステパノを見しに、その顔は御使の顔
の如くなりき。

ステパノは聖霊に満ちていた。そして、大演説をいたしまして、７章の終わりの方ですが、イスラエルの歴史をずっと語ってきて51節で、

51項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆らう、その先祖
等のごとく汝らも然り。……

「汝らは常に聖霊に逆らう」

という言葉が非常に響いてしまったわけです。

54人々これらの言を聞きて心、怒りに満ち切歯しつつステパノに向かう。55
ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に

立ちたもうを見て言う、56『視よ、われ天開けて人の子の、神の右に立ち給うを見る』57ここに彼ら大声に叫びつつ耳を掩(おお)い
非常にけがしことを言う、冒瀆だというわけです。
心を一つにして駆け寄り、58ステパノを町より逐(お)いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。59斯くて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』60また跪(ひざま)づきて大声に『主よ、この罪を彼らに負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠りに就けり。
眠りについたのではない。天界に行ってしまった。私は、このパウロの回心の伏線をなしているものは、どうしてもこのステパノであると思う。彼の意識の上には出てこないですよ。けれども、このステパノという聖霊の器がそのようにして輝かしい殉教の第一の死をとげて、また自分たちのために祈っていた。しかしながら、
「なんだ、あの野郎！」
というわけですよ、パウロにしてみれば。
これは肯定して、ますますサウロは、
1サウロは彼の殺さるるを可(よ)しとせり。その日エルサレムに在る教会に対(むか)いて大いなる迫害おこり、使徒たちの他は皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。……
と。いよいよサウロは逆にいきり立っている。自分の信仰、自分の主義主張に熱心なサウロは、この驚くべきものにぶつかって、かえってこれを
「なにを！」
というようなわけでいきり立って、いよいよマイナスの方に加速度的に向かっている。
「どうも、あれは素晴らしいが、俺の方はちょっと間違っているかな」
なんて、そういう疑いを持ったわけではないと私は思います、もちろん。であるから、彼はいよいよいきり立っていく。
私が言おうとしていることは、どんなにパウロがいきり立ちましても、どんなにステパノを否定しましても、このステパノの御霊の実存は、パウロの知らないところでパウロの執り成しをなし、パウロをどん底から背負っているということです。このステパノの祈りと実存、殉教の死というものは、これを復活のキリストは見ておられる。第一、彼はキリストを見て天に行ってしまった。ステパノはキリストと深い交わりの――もうこれは「交わり」どころのさわぎではない――火花が散っている。電光よりも素晴らしい霊光が、霊波がバリバリ通っている世界であります。この祈りは、この実存はキリストに伝わっている。また、ステパノにかぎらず、他の無名の者たちに対するサウロの迫害、これはみんな天に届いている。

●何ぞ我を迫害するか

それが天に届いているということは、どこにその言葉の証明があるかというと、読んで行きましょう、９章。

1サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝（おびやかし）と殺害との気を充（み）たし、大祭司にいたりて、2ダマスコにある諸会堂への添書（そえぶみ）を請う。この道の者を見出（みいだ）さば、男女にかかわらず縛（しば）りてエルサレムに曳（ひ）かん為なり。3往きてダマスコに近づきたるとき、忽然（たちま）ち天より光いでて、彼を環（めぐ）り照らしたれば、4かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。

この、

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」

というこの「我」という字であります。キリストは天界にいて、サウロがどんなにいきり立ったって、とにかく手は届きはしませんよ。けれども、キリストは、「わが弟子を」とも言わなければ、「わがステパノを」とも言わなければ、「わが誰々を」とも言わないで、「我を」と仰った。

マタイ伝18章をちょっとみますと、

「1そのとき弟子たちイエスに来りて言う『しからば天国にて大いなるは誰か』2イエス幼児（おさなご）を呼び、彼らの中に置きて言い給う、3『まことに汝らに告ぐ、もし汝ら飜えりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。4されば誰にても此の幼児のごとく己を卑（ひく）うする者は、これ天国にて大いなる者なり。5また我が名のために、かくのごとき一人の幼児を受くる者は、我を受くるなり。

「幼児を受け者は私を受けているんだ。幼児を傷つける者は私を傷つけるのである」と。

「ステパノを迫害する者は私を迫害しているのだ」というのと同じことです。これは受ける方ですが、退ける方も。退けても受けても、それはみんなキリストにかかっている。キリスト彼自身に係わっている。キリストの者を受けようが、キリストの者を迫害しようが、どっちもキリストそのものに係わってくる。

……10汝ら愼みて此の小き者の一人をも侮（あなど）るな。我なんじらに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり。」（マタイ18・1～10）

私たちのこの存在は立体的なんです。平面的でなくて、しかも次元はこの絶対次元の存在者と一つになっている在り方です。だから、これが迫害されると、それはピーンとキリストにくる。「なんぞ我を迫害するか」と。

5彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』

あまり圧倒的な言葉ですから、「主よ」と言いました。「あなたはどなたですか」と。

答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。

まぁ学者がいろいろ言いまして、

「一体、パウロという人は生前に一遍くらいキリストを見ているのだろう。それでなければ、こんなことを感じないだろう」

なんてなことを言う人もいます。けれども、私はそう思わない。おそらく、パウロはこの肉のキリストは知らなかった。直弟子とは違う。けれども、もちろんキリストのことは聞いてはいた。聞いていたどころのさわぎではない。だから、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

という声を聞いても、わからない。「誰ですか」なんて。「あっ、あのイエスか」とはこない。そしたら、イエスだと言う。「ああ、あなたがイエスか」てなわけです。

6起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』7同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。8サウロ地より起きて目をあけたれど何をも見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、9三日のあいだ見えず、また飲食(のみくい)せざりき。

●体見

コリント前書9章に、

「1我は自主の者ならずや、使徒にあらずや、我らの主イエスを見しにあらずや、汝らは主に在りて我が業ならずや。」（コリント前9・1）

とある。ここに、

「主を見た」

と書いてある。このパウロが「見た」というのは、このダマスコ途上の体験のことを言っていると見てよろしいのであります。栄光の主にでっくわした。そして、彼は、私たちがお互いにこうやって見るよりかもっと素晴らしい見方をして、そしてとうとう自分の目が見えなくなってしまった。

私はこれを

「体見」

という。体(からだ)で見る。まぁこんな言葉は今日初めて使います。ペテロやヨハネやヤコブというのは、地上でキリストに直々にでっくわしまして目で見てましたよね。けれども、パウロは体(からだ)で見てしまった。ダマスコ途上で。なぜ、身体で見たかといいますと、彼のただ肉眼が驚くべき光に撃たれたばかりでなくて、全身がそれこさ痺れてしまって動けなくなってしまった。全身が霊縛されて、霊に縛られてしまって、そこにぶっ倒れてしまった。そして、ものも言えない。口も動かない。

私たちの、皆さんの間にも、集会でそのようなことになる方もある。それで一晩でガラ

リ変わってしまう。そういうようなのが、身体で見たこと。これは目の錯覚と思うような見方とは違う。もう直々にきてしまっている。もうどうにもならんと。このキリストの存在を外側から見たのではなくて、この活けるキリストの生命に直々に触れて、本当にこの生命を見たわけだ。キリストの生命を見た。

「一体、キリストは十字架にかかって死んだのではないか。それを、みんなが復活したなんて言っているけれども、あんなことはどうも」

なんてなわけで、パウロはいい加減に取り扱っていただろうと思いますよ。ところが、けなして、ステパノの殉教に対してもいきり立っていたパウロは、とうとうひっくり返された。しかし、彼はただ一つ取り柄があった。それは何かというと、とにかく彼は熱心なんです、一生懸命です。

「私はただしい。この義は、わがうちなるこの義は、私の神に仕えているこの在り方はただしい」

と。彼は熱心であったが、それはとんでもない熱心であった。この熱心は、キリストは見てくれる。全存在的な熱心なんです。ただ頭ばっかりの熱心とか、聖書を研究している熱心とか、そういうのではなくて、正直、全存在的な熱心です。

その頑張り方はちょうどヨブみたいだ。ヨブが、

「私はただしい。なぜ、私はこんなに苦しまされるのか、わからん。義人が苦しめられるのは一体なにごとか」

というわけで、三人の友人が来て、どんなに何のかんのと言おうと、また、最後のエリフがやって来て言おうと、なかなか承知しなかった。しかし、とうとう最後に彼は神の前に心がガラリ砕けて、

「私は今まで聞いていたが、今度は本当につらつら自分の目で神を見た」

と言って平伏した。あの時に平伏した。存在をもってぶつかっている人は、神さまはいつかその存在をひっくり返す。

「頭ばっかり、心ばっかり」

という部分的なものはダメですよ。全存在的でなくては。

キリストが天界からパウロを見て、

「こいつをひっくり返して、本当に自分の僕として福音の器としよう」

と。しかし、彼はステパノの殉教すらも承知しないで、逆効果みたいなやつですから、これはもう仕方がない。ステパノの殉教を見たって、これはダメなんだ、逆効果だから。仕方がないから、これを直々にやっつけてやろうというのが、キリストの愛なんです。だから、これはもの凄いキリストの愛なんです、この電光石火でもってぶつかって来たのは。ひっくり返した。

キリストが突破して、キリストが突破したことによって、彼は身体で見さしめられてし

まった。これは受け身ですよ、「見る」といったって。身体で見させられしまった。これは、もう絶対に有無を言わせない。いわゆる感情でもなければ、いわゆる知識でもなければ、一切の人間の側のものを超えたところの見方です、この「体見」というのは。つらつら体見させられてしまった。

この「体見」の「見」は、経験の「験」でもいいけれども、それよりかこの「見」の方がもっとおもしろい。まぁこんな字を使われては困りますけれども、そういうわけですよ。

私たちは本当にパウロ的なこの「体見」、体で見るというところに来るまでは、これは福音の世界に入れないんです。福音の世界は、絶対にこの体見に来るまでは、パウロ的な体見に来るまでは、福音の世界には入れない。どんなに聖書を研究し、パウロの神学が分かろうが、パウロの信仰の構造が分かろうが、福音書がどんなに註解できるほどに分かろうが、ダメですよ、この体見にくるまでは。

●キリストの突破

これは有り難いですね。もし、他の立派さでもって福音がつかめるなら、その福音は本当は福音ではない。私たちの、福音というものの素晴らしさは、これは絶対無条件です。こちらがちっとも素晴らしいことを要しないところのものに本当の福音の素晴らしさが出てくるんです。

私は、人間的な素晴らしさなんてものはひとつも感心しませんよ、そんなものは。我々は、キリストの福音の素晴らしさというものには無条件に降参する。これは誰でもがこの福音の素晴らしさを受けとることができるし、この「体見」をするまでは、いかなる素晴らしいようなことをしても、あるいは研究をしても、聖書がどんなに分かっても、それは外側から分かるばっかりで、この福音はつかめない。

我々の信仰の決意とか、決断とか、

「信仰は決断である」

とかよく言うけれども、そんなものではない。これは本当にキリストが切りかかってきたところの、その驚くべき恩寵の啓示のつかみかかりです。キリストの突破ですよ。復活のキリストの突破によって、突破されて初めて、身体そのものをもって見る。

「世界中のものが何と言おうと、絶対にこれは否定することができない」

という、この体見です。この体見にくるまでは。この体見にきたからこそ、このサウロが本当にこれでひっくり返された。心がひっくり返ったんだ、回心というのは。本当に全存在が、この心が本当にひっくり返されて火花を散らした。パウロの中に光が本当に形成された。これが、

「天よ驚け、地よ驚け」

という光なんです。これが彼の中に入ってきた。

●御霊のバプテスマ

それで、ちゃんと示されるままに、

10さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影（まぼろし）のうちに主いい給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』11主いい給う『起きて直（すぐ）という街（ちまた）にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。12又アナニヤという人の入り来たりて再び見ゆることを得しめんがために、手を己がうえに按くを見たり』

と。そういう示しがこのアナニヤに来ている。これは全くこの通りなんです。

13アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。14また此処にても凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』

「そんな者をこれから助けるんですか、いたわるんですか、とんでもないはなしではないですか」

とアナニヤは言うわけだよね。

15主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』

これも「デイ」という、「受けざるをえざるかを」です。

17ここにアナニヤ往きてその家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主、即ち汝が来る途（みち）にて現れ給いしイエス、われを遣（つかわ）し給えり。

まぁ実に不思議なことだね。申し合わせたようなはなしだ。けれども、申し合わせでも何でもない。これはみんな御霊の導きと声であります。

なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』18直ちに彼の目より鱗（うろこ）のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、19かつ食事して力づきたり。

この「見ることを得たり」が、さっき言ったこの「体見」と同じ「見る」でありますが。この事実。

私たち人間にとって事実中の事実とは何かというと、私たちの魂を、霊を震撼させる事実であります。霊を震撼させる事実でないものは本当の事実ではない。そんなものは消えていく。諸行無常だ。諸行無常の中に諸行無常でない事実がある。それはこの我々の霊を揺り動かすところの事実であります。ただ心くらいではダメです。あるときは、「心」という字は「霊」と同じ意味に使うことはありますけれども。もちろん頭はダメ。単なる身体でもダメ。この霊そのものを震撼させ、その存在そのものをひっくり返すような事実が、これだけが本当の事実です。

今はキリスト教の世界において、この御霊のバプテスマということがいかにいい加減に取り扱われているかということにつくづく思うのです。

私自身、来年は還暦とかいってまた暦が戻ってきますが、永年、無教会に育ってきましたけれども。それは立派な聖書の講義もなさいます。祈りも決して偽りではありません。みな筋は結構でございます。私も始めから決して自分が偽りだったとは思わない。そして、本当に集会でよく満たされてきた。けれども、そこがなお、あるところまでである。ここにちょうど割れ目があるけれども、これから上へ出て行かない。カーブがね。

●十字架の突破口

あるときにこいつが上に出た。これが御霊の突破の事態です。この御霊の突破の事態でこれが上へきた。もう人間小池がどうであろうと、そんなことは関係ない。破れ傘みたいな私ですが、この破れ傘の中にキリストの原始微粒子が入ってしまった。このキリストの原始微粒子であるところの、この聖霊が入ってしまった。

「では、どうしてそれが入りましたか。このところの突破はどうしてできましたか」

と。これが教会でも無教会でも、しょっちゅう言っているところの――何も珍しくはない――十字架ですよ。珍しくない十字架だけれども、その十字架が十字架されているわけだ。

パウロは十字架が分かってから信仰に入ってきたのではないですよ。パウロは、十字架がちっとも分からない。

「十字架なんてものは」

というわけで、十字架を頭から否定してかかった。その十字架を頭から否定してかかっていたそのやつを、キリストが上から来て、突破させた。キリストがパウロの中を突破したのは、実はパウロの中にちゃんと十字架という突破口を通して、キリストの聖霊は入って来ているんです。

「一体、どこから入って来たのだろうか」

と、パウロはあとからよくよく祈って考えてみた。これが彼が直ちにエルサレムに行かず、また先輩にもはからず、ひとり荒野に行った。「アラビアに行って十何年かいた」なんて書いてある。アラビヤといわれるのはどこかしらん。そのアラビヤという荒野に行きまして、深く冥想して、深く自分の中に内在せしめた。そうしたらば、ここは自分が非常に一番けなしていたところの、その焦点の十字架であったということに気がついた。

「これが私を、この自己義認の、俺はと思っていたその自我を本当に贖っていたんだ」

と。

●義の福音体キリスト

「義」という字は、「羊の我」と書く。即ち、羊飼いに対して羊となり、神さまの御意を本当に「はい」と言って全存在をもって受けとる姿が「羊」です。キリストは「羔（こひつじ）」と言われる。そういう我になったときに、それが本当に「義人」なんです。そういう我になったのは、ナザレのイエス・キリストのほかに誰もいない。

「義人とは羊の我になりたるものなり」

と。これは、

「神の羔キリストのほかに本当の義人はいない」

とパウロが言ったのがそのことです。

この漢字というものは素晴らしいではないか。私は漢字というのが大好きだ。漢字というのは世界で一番素晴らしい。日本人は漢字をだんだん制限して貧弱にしてしまってバカみたいなものですよ。

この義人は今までの義とは違った。律法の義でなかった。今度はキリストという、

「神の義は福音のうちに現れた」

と。神の義は律法に現れたのではなくて、神の義は福音に現れた。その福音は、福音を体しているところの福音体であるキリストに現れた。キリストこそが己を完全に神に献げまつって、神の意志に全託して行った。そして、本当に神と深く交わった。神と深く交わって神の意志を行じた。

「神の意志を行ずる」

なんて言いましても、皆さん、それがまたお題目になったらダメですよ。神の意志をいかにして行ずるかというと、神さまと親しまなければ行ぜません。私はこの「親しむ」という言葉は大好きだ。「親」という字だ。キリストを親とし、父なる神さまを親とする。「親とする」というのは、「親しむ」という字だ。この頃の若い人は親を親としないで困る。だんだん日本人はおかしくなる。どうか、キリストを親として親しむ。自分はキリストの子のごとく。深い親しみの世界に入ってこそ、喜んでこれを行ずるんです。

●我はキリストの僕

だから、もうパウロが今まではいきり立って

「我こそは」

と言うのが、すっかり抜けてしまった。親しんで喜んで今度は、「律法を喜ぶ」どころのさわぎではない。

「自分は本当に間違っていた。とんでもないことをしていた。キリストこそが本当に神さまを立てていた。自分は神さまを立てていたのではない。律法というものを実は立てていた。律法というものを立てていたので、神さまを本当に立てていた

たのではなかった。活ける神を本当に立てていたのではなかった。結局、自分は律法を誇って、自分を誇っていたのだ。自分を誇っていて、自分を立てていた」と。今度は、キリストに本当に親しんで、キリストという別な霊法です。霊法、霊的法則、これを福音という。福音は即ち「霊法」であります。

喜びの音信。これが彼の中に、律法ならざる律法、活ける新しき律法として、活ける律法として彼の中に臨んできた。この中に乗っかってしまったら、本当に新しいパウロという人は展開を始めて、彼の中にもの凄く新しくいろんなものが澎湃（ほうはい）としてきた。それがまるで決河のごとくに文字となって表れて、あのいくつかの書簡が展開していく。その書簡が展開したのは、なにもユダヤの律法というものをいろいろ新しい法則で説明しているのでも何でもない。要するにそれは、

「自分は悪かった」

という平伏し、降参です。

「主よ、私は僕です。我はキリストの僕」

と、何回も彼が言わざるをえないのは――この「僕」と言うときに彼は決して屈従的な意味における奴隷を言っているのではない。言葉は「奴隷」という字ですけれども――本当に喜んだ、喜びの僕です。キリストだってこれは、

「エホバの僕」（エベット　ヤーヴェー）

という。旧約聖書のイザヤ書にあるけれども、「エホバの僕」となったキリストは、即ち喜びの僕なんです。喜びの僕は即ち、彼がやはり「神の子」である。「アバ、父よ」と。「子」であるという本質と、「僕」であるという使命とが切っても切ることのできない関係になる。

「我は子にして僕。僕にして子である」

と。キリストが父なる神に対するところの関係です。「父よ」と。だから、パウロもそのようにキリストに対して本当に僕となり、「主よ」とこのときに言った。「主よ」と言う時には本当に親しみを持った「主よ」であります。初めて、それは降参して、一体どんなに自分はこの主から愛されたんだろう。何をもって愛されたんだろうかと。

自分は迫害して人殺しをやったが、それはみんな実はキリストは、

「私を迫害し、私を殺していたんだ」

と。パウロは、

「キリストを十字架にかけたのは私だった。私がキリストを十字架にかけた。我は罪びとの首（かしら）なり」

と。そう平伏したのであります。ところが、この十字架はキリストの方は、

「私が自分でお前たちのために十字架にかかった。心配はいらん。私が自分からかかったのだから」

と。我々の最悪のことをもう全然顧慮しない。

「私がかかったから、お前たちをみんな赦した」

と。

●聖霊の突破

これがガラテヤ書2章20節のあの驚くべき言葉に展開するところの所以（ゆえん）であります。

「19**我は神に生きんために、律法によりて律法に死にたり。**20**我キリストと偕（とも）に十字架につけられたり。最早（もはや）われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて**

神の子を受けとることによって、

生くるなり。

新生の内容はキリストの愛の生命であると。

21**我は神の恩恵（めぐみ）を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然（いたづら）なり。**」（ガラテヤ２・19～21）

「義とされることが律法によるならば――自分は律法の義を非常に今まで誇ってきたんだが、そして、キリストを信ずる者を迫害してきたんだが――それだったら、キリストの十字架せらたるは空しい事である」

と、はっきり彼は今までの信条を完全にひっくり返して言っている。

皆さんは私の集会にいらっしゃるから、そうお感じにならないかもしれませんけれども、今日我々が学びましたところのパウロの

「体見」

ということが、私から聞いて、ただ

「そうですか。どうもそうらしい。まぁ確かにそうです」

くらいのことではダメですよ。この「体見」ということが本当に皆さんのなかで、ある時はっきりと形を、姿を結ばなくては。

「もう私は、誰が何と言おうが、絶対にこれは否定することができない」

というものが、あなた方の中に何ものかが形成されるまでは。パウロが、

「産みの苦しみをする」

と言った。それは十字架を深く冥想し、また大いに祈ることは大事です。けれども、それだけでもなおダメ。

この「体見」ということは、実際に我々が生活してみて、いろんな事にぶつかるでしょ。いろんな事にぶつかって、あるところでヘタヘタとなるようなことではダメです。どんなにヘタヘタとなり、行き詰まりとなり、やけくそになるような時がきましても、なおかつ大丈夫というものを――いや、行き詰まったり、ヘタヘタとなったり、スランプになったり、

いろいろな事になった時にこそ――本当にキリストの十字架、この贖いの十字架と、パウロの中に射し込んできたキリストの聖霊の生命を、身近にその時に受けとって、そのいろいろな事態にでっくわした時に、

「私はこれはどうにもならん」

という。人間の側ではどうにもならんですよ。どうにもならん時に、しかし、

「もうそいつは突き抜けたよ」

というものをそこでもってはっきりと受けとったら、

「それは本当に聖霊が来た」

ということです。そして、自信ならざる本当の自信が湧いてくる。十字架の冥想また祈りは大いにやってください。けれどもまた、冥想や祈りだけではなくて、その生活そのものをもっていろいろな事にぶつかった時に、そこをウワーッと、この祈りが本当にその瞬間においてその場において生きて、そして突破されていく。

「うむ、私のうちに聖霊が突破をさせてくれたか」

と。これです。

●キリストの霊名

パウロの回心のところの、

「わが名を持ち行くわが選びの器である」

というこの、

「わが名を持ち行く」

とは一体何ですか。皆さんの中の、この「わが名」「キリストの名」という――我々は「キリスト者」という――この「キリストの名」というものは何か。私も長いこと、どうもピンとこないんです。

「イエス・キリストの名によりて」

なんて、祈りの一番あとで言うでしょ。そうすると、みなが「アーメン」と言う。名ばっかりの名では、本当は名ではないですよ。この復活のキリストがなぜ、

「わが名を持ち行く選びの器」

と仰るか。聖霊が本当に化体（かたい）されて、中に聖霊のバプテスマを受けたときに、私たちの中にキリストの霊名が――名だけではいかん、キリストのこの霊名が――キリストの霊名が刻み込まれる。どんな素晴らしい彫刻も、ダイヤモンドで刻んだよりももっと素晴らしい刻みが我々の存在の中に書かれる。キリストという名が。

「私はキリストという名である」

と。「小池辰雄」なんていうのではない。私の中には「キリスト」という名がある。「キリスト」はギリシヤ語でいうと、「X」（キー）だ。十字架だ。このバッテンが、大バッテンが私

の中に、皆さんの中に刻まれている。これは何ものも消すわけにいかん。これが即ち、「名を帯びて」いるんです。名を担っている。この名を担っているのが、皆さん一人びとりが「キリスト者」――「者」なんていらんよ、「キリスト」でいい――「キリスト」という

「クリストス、膏(あぶら)そそがれたる者」

ということ。「膏」は御霊ではないですか。「キリスト」という名は即ち「御霊」と同じこと。

「御霊という膏を注がれたる者」

というのが、皆さんが「キリスト」という名でありますぞ。もし、この名を消したら、死にますよ。その名が消えたら死ぬような名ですよ、これは。

「名によって、なるほど私たちは名で生きているなぁ」

と。キリストという生命の名で、活ける名で生きている。

「それは見えますか」

ではない。存在そのものが即ちその名を表す。存在そのものがその名を表す。だから、名を運ぶ者、名を担う選びの器である。

●あるがままそのままで

パウロというのは正にキリストという名の男である。これからは、名に化体されている男である。こんなけしからん野郎がね、キリストの不倶戴天の敵みたいなやつが、今度はキリストなしにはどうにもならんという男になってしまった。クリスチャンというものは、キリスト者というものは、このようなパウロ的な体験（体見）をさせられた、聖霊のバプテスマを受けたところの者である。

その体験（体見）の仕方は、この使徒行伝9章と同じ必要ありませんよ。皆さん一人びとりいろいろです。いろいろだけれども、しかし、その質においてはみなパウロと同質なこの「体見」をしていく。これをしなかったならば、この山でもって何らかの意味においてこの「体見」を受けとって下山しなかったら、つまらんです。我々は、リクレーションしているのでもなければ、いわゆる修養会をしているのでもなければ、聖書研究会をしているのでもない。我々はこの「体見」を見て帰る。この「体見」を見てでなければ帰らんという、皆さんはそういうひとであります。そのためにこの山にいる。

「どうも、会社のことで、どうしても今度は来られません」

と、電話してくる人がいました。

「お気の毒ですね」

と。私はもうそれ以上は言わなかった。本当は私の胸の中にはもう一つ別な言葉がある。

「それでも来なさい」

と。それは言わなかった。それでも突き抜けると、たとえ会社から放り出されても今度は、

「これをつかまなければ、私は生きているわけにはいかん」

というような求めでくれれば、本ものです。皆さんは、とにかく、みなその質の求めでいらっしゃったと思う。

このように、ユダヤ教のチャンピョンであったサウロ、それが異端だと思っていたところのキリストが偉大なる権威をもって、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と言って迫ってきた。皆さん一人びとりにキリストが今、名を呼んでいらっしゃる。

「我を本当に受けよ」

と仰る。パウロが散々言っているところの、

「エン・クリスト」（キリストの中に）

という「中」の世界です。

「どうも私はこういう癖がありまして。どうも私はこういう頑なで、どうも私はまだ聖霊がよく分かりませんで」

なんていう、いろんな「どうも」があるかもしれないが、そんな「どうも」はいらんですよ。そんな「どうも」はいくらあったっていい。そんなことは心配いらんから。皆さんはあるがままでいい。

「どう成らなければ」

という、そんなこわばった条件はひとつもいらない。無条件です。無条件ということは、

「あるがまま」

ということ。あるがままでいい。何か条件を付けるから、それを条件という。無条件ということは、「あるがまま」ということなんです。

「あなた方は無条件で」

ということは、

「あるがままで」

ということ。

「こうしてから来なさい」

というのは条件でしょ。

「もう少し心を落ち着けてから、もう少し聖書を呼んでから、もう少し祈ってから、来なさい」

というのはみんな条件でしょ。ところが皆さんはそれはあるがままでいい。今、キリストは、

「無条件で、あるがままで、そのままで、いつわりなく、私に来なさい」

と。一人びとりの名前を呼んで、無条件に、

「我にきたれ」

と言う。

「私は大きな扉を開いている。十字架でお前さんの心の扉はみんな開いたよ」

と。開いたんです、十字架で。

「まだ開いていません」

ではない。ちゃんと開かれている。

「全託したいんですが、なかなか全託できません」

なんてね。

「全託したいけれども、全託できません」

と、なぜそんなことを言うか。全託できる場は、キリストの方でちゃんと開いてござる。

「全託できない、あるがままでよろしい」

と。全託できない、あるがままの、でたらめの、迷いの、混沌の、不純の、あるがままでいいと。あるがままで、何も取り澄ます必要も何もいらん。

「私はこの通りでござい」

という、皆さんは人間です。それを、

「聖書研究でどうのこうの」

とか、

「信仰の純粋性」

とか、やれ何とかかんとかと、そんなことをやっているから、いつまでたっても始まらない。それが、さっき申し上げた、「抜けた」ということです。

「抜けた顔で来なさい。あるがままで。何もとり繕うことはいらんから、抜けた、ボケた顔で来なさい」と。

●キリストの懐の中に

今、眠っている人もあるかもしれないけれど、眠ってたっていいよ。そのかわり、キリストの中に眠らなければ。どこに眠っているかと。キリストの懐の中に眠るならいいよ。そして、無条件にキリストの中に私たちは自分を投ずる。そういうことは全部、祈りの世界です。

二日目の晩に祈祷会をやるけれども、あればっかりが祈祷会ではない。始めから終わりまで全部これ祈祷会。私はこうやって今、語っているけれども、これはみんな祈祷会です。みんな祈りの会です。始めから終わりまでこれは全部、祈りの世界です。祈り心地の世界。キリストの中に自分をあるがままに乗せて、語ろうが聞こうが、これはみんな祈りであります。楽だね、本当に。そういうのが本当の祈りなんですよ。

「この私を一体、キリストから離せるか」

ということが皆さん一人びとりが、なっている、またなれる。

「躓いてみたら、キリストの懐の中にありました」

ということ。これが私たちが、どういうことがありましても、決してうろたえないところの、恐れなきところの、疑いなきところの、いろんな下らない思案のないところの世界です。

これが原始の福音の、使徒たちの福音の質、性格なんです。パウロがあんなやかましい男だったのが、なんと楽になってしまって、

「**われ一切の秘訣を得たり。有れども無きがごとく、無けれども有るがごとし**」

なんてなことを言っている。

「**憂うることくだけれども、喜びである。倒さるれども亡びず。せん方尽くれども絶対に望みを失わず**」

とかね。なぜ、あんなことが言えるか。彼の信仰が素晴らしいからでも何でもない。ただキリストの中に本当に捕まえられてしまって、もうどっちに行っても――ちょうど、私たちがどこへ行ったって空気の中にいるじゃないですか――どこへ行ったって空気の中にいるように、キリストの中にある。

●本当の大和魂

いいですか、取り澄ました世界ではないですよ。それが本当にキリストと深く和した世界、大和（たいわ）の世界。本当に大平安の大和の世界です。私たちの国が大和（やまと）だから、これを本当に福音的に私は活かしたい。大和というのは、そのようなことを「大和（やまと）魂」という。大和魂というのは、これはキリストの中に、パウロ的に本当に、ヨハネ的に本当に、ペテロ的に本当に、入れられてしまった。使徒行伝のペテロ、ヨハネ、パウロのようになってしまったのが、これが大和魂という。本当の大和魂です。

「なんと素晴らしいなぁ、大和魂というのはそんなものだったのか」

と。これは誰も言いやしない、そんなことは。そうでしょ。それは私たちに示すところの聖霊がかく大胆に言わしめたもう。

私たちがこの集会の一番先にどうしても深く、この御霊のバプテスマということが、そのような楽な――なにも特別な何ものでもない――本当の特別だということ。特別のないことが本当の特別なんだ。そういう世界であるということにあなた方が、

「なんだ、そうか。なにかしらけれども、私はもう非常に楽になりました」

というところに皆さんは今、入っていらっしゃると、私は信じますが。

「入ったから、いよいよそうなってください」

と言う。

「入ったから、ただ安心だ」

ではない。まず、神さまはその恩寵の場を実質的にお与えになると、キリストは、

「だから、いよいよそうなれよ。ならしめるぞ」

と言うんです。また前進せざるを得なくなってくる。驚くべき推進力がくるから。

●中心を回る回心

キリストが福音書の一番先に、

「汝ら、回心せよ。天国は近づいてきた。私という天国がお前たちの中に近づいてきたから」

と。「回心」ということをもうひとつ面白く解すると、

「中心の回りをグルグル回っている」

と言ったっていい。キリストという中心の回りを私たちはグルグル回っている。太陽の回りを地球が回って、そうして前進していくように。キリストの回りをグルグル回りながら、回心また回心。廻りまた廻りながら進んで行く――まぁそれはこの「回心」という言葉とは違いますけれども――そんな気持も出てくるわけです。

「心をめぐらせ」

と。心をめぐらせる中心をめぐっている。そして、キリストが本当に中心になっている。キリストという、御霊のキリストが私たちの存在のまっただ中に、中心にくるわけです。

自分を「僕」と言って本当に平伏し、また「キリストよ」と言って本当に親しむというと、その中心に御霊がきて、自分が本当にキリストという名を中心に持つ人間になる。自分はキリストではない。けれども、自分はキリストという名を担っている者になる。それを深く冥想してごらんなさい。驚くべきことですから。キリストという名が私たちの本当の名――私たちの本当の名は外には言えない。外には言えないけれども――キリストという、非常に何とも言うことのできない自覚にくる。

「贖われたる罪びと」

であるから。贖われたる罪びとであるからこそ、キリストという名が私たちの存在の中心になる。

だから、たとえばAさんは、「キリストのA」と言う。ただ手放しの「A」ではない。そのような具合で、キリストのものなんだから。「キリスト・A」という名前なんだ。みんなそうだ。私たちの名前の上にこの「キリスト」が付いている。これが本当の本名だ。「のもの」なんていうのは、まだちょっとそれがズレてしまう。「キリスト・A」という、そういう自覚になったら、凄いことになる。それだから、いよいよ平伏しの魂なんです。これで傲慢になったら、とんでもないはなしだ。これはいよいよ平伏しの魂に私たちはなる。平伏せば平伏すほど、このキリストという名は光ってくる。しかも何も心配はいらん。もう十字架されて常に展開していく。いいですか。

福音は、実は平々凡々であるが、平々凡々の中に、これは説明することのできない驚くべき内実がこもっている。私たち御霊のクリスチャンというものは、この山を下るときには、なにかもう今までとは違ったということになる。

「なにかゴタゴタするものはみんな無くなってしまった。実に簡単明瞭になってし

まった」

と。実に簡単明瞭になってしまって、

「なんという、これは楽なことか」

ということに、皆さん、なりますよ。そして今度は、いろんなことにぶつかってごらん。これが本当の実は力である。

まぁたくさん、このキリスト教界にはいろんなものがありますよ。七面倒くさいはなしです。けれども結局、一つ欠けている。

「汝ら、ただ一つのものを欠く」

とキリストが言われた。「一つのものを欠く」とは何か。御霊という一つのものを欠いている。私たちは何もない。けれども、

「汝らは御霊という一つのものがある。無くてならないものは、ただこの御霊である」

と。聖霊である。どんなに「聖霊派」なんて悪口言われたって、一向そんなことで驚きません。それはパウロが、ヨハネが、ペテロが、この書簡の中でかくも語っていること。私たちはなにも「御霊、御霊」なんて、口で言う必要はない。口で言う必要はないけれども、私たちの本当の自覚はこの聖霊です。

「いくら飲んでも喉は渇くよ。けれども、私はお前に渇かない水をやる。それは泉のごとくなって迸り出るよ」

と言われたのが即ち、この聖霊という水、聖霊という生命であります。ヨハネ伝４章。

●一番大事なのは御霊

どうですか。そうなってきたらば、もうはっきりと、

「私たちクリスチャンは、この御霊だけだ。信仰も、愛も、望みもいらん」

なんて、私は随分ひどいことを言う。「信仰も愛も望みもいらん」なんて。パウロが、

「一番大事なものは三つだ。信仰と希望（のぞみ）と愛だ」

なんて、あんなことを言ったから、間違える。パウロはコリント前書13章で、「一番大事なのは、信仰と望みと愛だ」と言った。実はその奥に、

「一番大事なものは御霊だよ」

というのがある。ずいぶん、私は乱暴なことを言うようだけれども、そうなんです。この御霊が来なければ、信仰が信仰でない、希望（のぞみ）が希望でない、愛が愛でない。論より証拠であります。皆さんは、自分の信仰の生活において正直、この御霊の火が燃えてきたらば、望みは本当の望みとなる。なんとなれば、

「天国は自分の中に来ているから、望みが本当の望みとなる」

ということ。

「愛する、愛する」

なんて言ったって、そんなのはダメだよ。御霊というものは愛の炎なんだから、これは流れていく、発していく。

「信仰、信仰」

なんて言ったって、そんな力みの信仰はダメだよ。御霊が来ていれば、キリストの信というものがちゃんと来ている。

信仰も望みも愛も全部、これはキリストの十字架が切り開いて、私たちに与えたもうところの御霊であって、これが切り開くことのできないサウロというやつをキリストがダマスコ途上でひっくり返してしまった。そうして、これをキリスト自身が突破した。

イエス自身が突破して、皆さん一人びとりはキリストに突破されるべき存在なんだよ。キリストに突破されてこそ、本当の突破体となる。そして、その突破口は十字架であった。あとから気が付いたって何だっていいですよ、パウロみたいに。始めっから十字架なんて言わなくたって。

「ああ、本当にそうだ。そうしてみたら、私の中にこんなに御霊が来ていた。この生命を天上天下の何ものとも代えることができるか。御霊という賜物を他の何ものとも代えることができるか」

と、パウロと共に絶叫できる。これが、

「かつ聖霊に満たされんためなり」

と、復活のキリストがパウロに約束していること。

「お前はどんなにわが名のために患難を得ても、それはどしどし突破させて、喜びの力をどんどん与えるぞ」

というのが、このキリストである。正直、人間の霊は、人間の魂はこの霊に、キリストの霊に本当に内接するまでは、力を得ない、生命を得ないようにできている。世界中のクリスチャンが何を理屈をこねようが、どんな本を書こうが、これが本当に事実でないかぎりはどうにもならないようにできている。絶対にごまかしのきかないようにできている。

ですから、皆さんは、この一点を、この一つを、この一事を本当に捕まえたら、そうしたら、もうあと何年地上にいようが、明日死のうが、どうなろうが、

「アーメン、ハレルヤ！」

でもってキリストの身証体となる。

「汝らはわが証人（あかしびと）である」

という証人となれる。

今日はそれで終わります。